

俊寛

菊池 寛

一

治承二年九月二十三日の事である。

若し、それが都であつたならば、秋が更けて、変り易い晩秋の空に、北山時雨が、折々襲つて来る時であるが、薩摩湯の沖遙かな鬼界ヶ島ではまだ秋の初めで、もあるやうに暖かだつた。三人の流人達は、海を見降す砂丘の上で、日向ぼっこをして居た。ぽか／＼とした太陽の光に浴して居ると、所々破れほころびて居る袷を着て居ても、少しも寒くはなかつた。

四五日吹き続いた風の名残が、まだ折々水沫を飛ばす波がしらに、現はれて居るものゝ、空は一杯に晴れ渡つて、漣のやうな白雲が、太陽をかすめて、棚引いて居る丈だつた。さうした晴れ渡つた蒼空から、少しの慰めも受けないやうに、三人の流人達は、疲れ切つた獣のやうに、黙つて砂の上に蹲まつて居る。康頼は、先刻から左の手で手枕をして、横になつて居る。

康頼も、成経も俊寛も、一年間の孤島生活で、その心も

氣力も、スツカリ叩きのめされてしまつて居た。最初、彼等は革命の失敗者として、清盛を罵り平家の一門を呪ひ、陰謀の周密でなかつたことを後悔し、悲憤慷慨に夜を徹することが多かつた。が、一月二月経つ裡に、さうした悲憤慷慨が結局鬼界ヶ島の荒磯に打ち寄する波と同じに、無意味な繰返しに過ぎない事に気が付くと、もう誰も、さうした事を口にする勇氣も無くして居た。その上に、都会人である彼等に、孤島生活の惨苦が、ヒシ／＼と迫つて来た。毎日のやうに、水に浸した乾飯や、生乾きの魚肉のあぶつたものなどを口にする苦しみ、骨身に徹へて来た。彼等は、さうした苦痛を圧倒するやうな積極的な心持は、少しも動かない。彼等は苦痛が重れば重るほど情気切つてしまひ、飯を食ふ外は、天気の良い日は、海浜の砂地で、雨の降る日は、仕方なくその狭い小屋の中で、たゞ溜息と愚痴との裡に、一日々々を過して居た。その裡に三人とも烈しい不眠症に襲はれた。その中でも、神経質の康頼が、一番ヒドかつた。彼は、夜中眠られない癖が、付いてしまつたので、昼間よく仮寝をする。先刻からも、横になつたかと思ふと、もうかすかないびきを立て、居る。長い間、剃刀を当てない髻が、ぼう／＼としてその瘦せこけた頬を搔うて居る。その上、褪せた唇の下端に

は、涎が今にも落ちさうに漉へて居る。

成経は、成経で、妖怪に憑かれたやうな、キヨトンとした眼附で、晴れた大空を、当度もなく見ながら、溜息ばかり吐いて居る。俊寛は、一緒に陰謀を企てた連中の、かうした辛抱のない、腑甲斐ない容子を見て居ると、自分自身までが情なくなる。

陰謀を企てた人間として、今少しは男らしい、毅然とした所があつてもいい。刑罰の下に、かうまで、へこたれてしまはなくつてもいいと思ふ。彼は成経がもう一度、溜息を吐いたら、それを機会に、たしなめてやらうと思ひながら、ぢつと成経の顔を見据ゑて居たが、成経はそれと悟つた訳でもあるまいが、クルリと俊寛の方へ、背を向けると海の方へ向いたまゝ、これもしばし、まどろむ積りだらう、黙り込んでしまつた。

二人の友達が黙つてしまふと、俊寛の心も張合が抜けたやうに、淡い悲しみに囚はれる。彼にも島の生活が、堪らなく苦痛になつて来た。都へ帰りたい。さうした渴に似た感情で、胸を責められるの上、成経康頼等の心持と、自分の心持と、日に増しこじれて来ることを感じた。人間が、三人蒐まるときは、屹度その中の二人丈が仲よくなり、一人丈は孤立する傾きのあるものだが、今の場合には、それが殊に烈しかった。康頼も、成経も、彼等の生存が、苦しくなればなるほど、愚痴になつて

来る。そして、過ぎ去つた謀反の企てを心の裡で後悔し始める。

人間は如何なる場合でも、自分を怨まないで、他人を怨む。そして、陰謀の発頭人であつた西光を怨む。引いては西光と一番親しかつた俊寛を怨む。彼等を、かうした絶海の孤島で、悶えさせるのは、清盛の責任でなくして、本当は、西光が陰謀を発頭したためであるかのやうな事を云ふ。西光の人格や陰謀の動機を、よく理解して居る俊寛には、彼等のさうした愚痴が、癢に触つて仕方がない。彼の神経は、日に増しイラ／＼する。さうして、何かの機みから、つい景色ばんで、云ひ争ふ。二人は俊寛を煙たく思ひ始める。そして、剛愎な俊寛に一致して反抗の氣勢を示す。そして、お互に心持を荒ませる。

此の頃、俊寛はよく、二人が意識して、自分を疎外して居るのを感じる。硫黄を採りに行く時でも、海藻を採りに行く時でも、よく二人限で行つてしまふ。その上、三人で居るときでも、二人はよく顔を寄せ合つて、ヒソ／＼話を始める。そんなとき、俊寛は堪らない寂寥と、不快を感じる。三人限の生活では、他の二人に背かれると云ふことは、人間全体から背かれると云ふことゝ、同じことだつた。俊寛は、さうした心苦しさを免かれようとして、自分一人で、行動して見ようかと考へた。が、一日自分一人で、離れて居ると、烈しい寂しさに襲はれる。そし

て、意久地なく成経と康頼との所へ帰つて来る。そして再び、不快な感情の裡に、心を傷けながら生活して行く。

今朝も、鹿ヶ谷の会合の発頭人は、誰たと云ふことで、俊寛は成経と、可なり烈しい口論をした。成経は眞の発頭人は、西光だと云つた。だから、西光又は平相国が、直ぐ斬つたではないかと云つた。俊寛は、いな御身の父の成親卿こそ、眞の発頭人である。清盛が、御身の父を都で、失はなかつたのは、藤氏一門の考へやうを、憚かつたからである。その証拠には、備前へ流されると直ぐ人知れず殺されたではないかと云つた。父のことを、悪しざまに云はれたので、日頃は言葉少い成経も、烈火のやうに激して、俊寛と一刻近くも、烈しく云ひ争つた。二人が、口論に疲れて、傷けられた胸を懐きながら、黙つてしまふまで。

成経と、康頼とが、横になつて居るいぎたない、容子を見て居ると、俊寛は意地にも、その真似をする気にはなれなかつた。彼は、胸の裡の、寂しさとムシヤクシヤした鬱懐とを洩す所のないまゝに腕組をして、ちつと考へる。すると、何時もの癖であるやうに、妻の松の前や、娘の鶴の前の姿が、まぼろしのやうに、胸の中に浮んで来る。それから、京極の宿所の釣殿や、鹿ヶ谷の山荘の泉石のたゞずまひなどが、髣髴として想ひ出さ

れる。都会生活に対するあこがれが、心を爛らせる。沢山使つて居た下僕の一人でもが、今侍いて居て呉れゝばなごと思ふ。俊寛が、かうした回想に耽つて居るとき、寝入つて居たと思つた成経が、急に立ち上つた。彼は、悲鳴とも歓声とも付かない声を出したかと思ふと、砂丘を海の方へ一散に駆け降りた。彼は、波打際に立つと、躍るやうに両手を打ち振つた。

「判官どの。白帆にて候ぞ。白帆にて候ぞ。」

さう云つて、康頼に知らせると、又悲鳴のやうな声を揚げながら、浜辺を北へ北へと走つた。

康頼も、あわたゞしい声に直ぐ起き上つた。俊寛も、白帆だと聞くと、直ぐ立ち上らずには居られなかつたが、白帆が見えると云つて、成経が浜辺を走つたことは、これ迄に二三度あつた。彼はよく、白雲の影を、白帆と間違へたり、波間に浮ぶ白鳥から、白帆の幻影を見た。

康頼は、遠に直ぐ後に続いて走つたが、俊寛は又かと思ひながら、無言のまゝ、跡から随いて行つた。成経と康頼とは砂浜を根よく走りつゞけた。俊寛も、彼等の熱心な走り方を見ると、自分の足並が、何時の間にか、急ぎ足になるのを何うともすることが出来なかつた。

その裡に、疑深い俊寛の眸にも、遙か彼方の水平線に、浪に

浮んで居る白千鳥のやうに、白い帆を一杯に張りながら、折柄の微風に、動くともなく近づいて来る船の姿が、映らずには居なかつた。

俊寛も、狂気のやうに走り出した。三人は半町ばかり隔りながら、懸命に走つた。お互に立ち止つて、待ち合せる余裕などはなかつた。走るに従つて、白帆もだん／＼近づいて来るのだつた。それは、九州から硫黄を買ひに来る船のやうな、小さい船ではなかつた。

成経は、感激のために、泣きながら走つて居る。康頼もさうだつた。俊寛も、胸が熱くなるしくなつて眼頭が、妙にむづかくなつて来るのを感じた。見ると、船の舳には、一流の赤旗が、へん／＼と翻つて居る。平家の兵船だと思ふと、その船に赦免の使者が、乗つて居ることが、三人に直ぐ感ぜられた。

船は、流人達の姿を見ると、舳を岸の方へ向けて、帆をひた／＼と降り始めた。やがて、船は岸から三反たんとない沖へ錨を投げる。三人は岸边に立ちながら、声を合せて欣びの声を揚げた。
追まに、俊寛をも除外しないで、三人は、手を執り合つたまゝ、声を揚げて、泣き始めたのである。

船は、流人達の期待に背かず、清盛からの赦免の使者丹左衛門尉基康を乗せて居た。が、基康の持つて居た清盛の教書は、成経と康頼とを、天国へ持ち上げると共に、俊寛を地獄の底へ押し陥した。俊寛は、狂気のやうに、その教書を基康の手から奪ひ取つて、血走る眼を注いだけれども、其処には俊寛とも僧都とも書いてはなかつた。俊寛は、激昂の余り、最初は使者を罵つた。俊寛の名が漏れたのは、使者の怠慢であると云ひ募つた。が、基康が、その鋒銚ほうぼうを避けて、相手にしないので今度は自分を捨てゝ行かうとする成経と康頼に喰つてかゝつた。そして、成経と康頼とを卑怯者ほうぼうであり、裏切者であると罵倒した。

成経が、それに堪へかねて、一言二言言葉を返すと、俊寛は直ぐカツとなつて、成経に掴みかゝらうとして、基康の手の者に、取りひしがれた。

それから後、幾時間かの間の俊寛の憤りと悲しみと、恥とは喩へるものもなかつた。彼は、目の前で、成経と康頼とがその垢じみた衣類を脱ぎ捨てゝ、都に在る縁者から贈られた、真新しい衣類に着換へるのを見た。嬉し涙を滾こぼしながら、親しい者からの消息を、読んで居るのを見た。が、重料を赦免せられない俊寛には、一通の玉章たまづさをさへ受くることが許されて居なかつ

た。俊寛は、砂を噛み、土を掻きむしりながら、泣いた。

船は、飲料水と野菜とを積み込み、成経と康頼とを収めると、手を合して乗船を哀願する俊寛を浜辺に押し倒したまま、岸を放れた。

そして、俊寛をもつと苦しめる為めの故意からするやうに、三反ばかりの沖合に錨を投げて、其処で一夜を明すのであつた。

俊寛は、終夜浜辺に立つて、叫びつづけた。最初は罵り、中途では哀願し、最後には、タワイもなく泣き叫んだ。

「判官どの、のう！ 今一言申し残せしことの候ぞ。小舟なりとも寄せ候へ。」

「基康どの、僧都をあはれと思召さば、せめて九国の端までも送り届け得させ給へ。」

が、俊寛の声は、渚を吹く海風に吹き払はれて、船へは少しも聞えないのだらう。闇の中に、一の灯もなく黒く纏もやつて居る船からは、応と云ふ一声さへなかつた。

夜が更くるに付け、俊寛の声は、かすれてしまった。おしまひには、傷ついた海鳥が泣くやうなかなかな悲鳴になつてしまつた。が、どんなに声が、かすれても、根よく叫び続けた。

その裡に、夜はほのくくと明けて行つた。朝日が渺々たる波の彼方に昇ると船はからりと錨を揚げ、帆を朝風にはたく

と靡かせながら捲き上げた。俊寛は、最後の叫び声を揚げようとしたけれども、声は少しも咽喉から出なかつた。船の上には、右往左往する水夫かこどもの姿が見える丈で、成経康頼はもとより、基康も姿を現はさない。

見る間に船は、滑るやうに動き出した。もう、乗船の望みは、少しも残つては居なかつたが、それでも俊寛は船を追はずには居られなかつた。船は、島に添ひながら、北へ北へと走る。俊寛は、それを狂人のやうに、こけつまろびつ追つた。が、三十町も走ると、其処は島の北端である。其処からは、翼ある身に非おひざれば追おひかけることが出来ない。折から、風は吹き募つた。

船の帆は、張り裂けるやうに、風を孕んだ。船は見る／＼裡に小さくなつて行く。俊寛は、巖壁の上に立ちながら、身を悶えた。もう声は、少しも出ない。たゞ、獣のやうに巖壁の上で狂ひ廻る丈だけだつた。

船は、俊寛の苦悶などには、何の容赦もなく、半刻も経たない裡に、水平線に漂ふ白雲の裡に、紛れ込んでしまつた。船の姿を見失つたとき、俊寛は絶望のために、昏倒した。昨夜来叫びつづけた疲労が、一時に発したのでだらう、其儘茫として眠り続けた。

彼は、その巖壁の上で、昏倒したまゝ、何時間眠つて居たかは、自分にも分らなかつた。一度目覚めたときは、夜であつた。

彼は、自分の頭の上の天空が、大半は暗い雲に掩はれて、そのわづかな切れ目から、一三の星が瞬いて居るのを見た。彼は烈しい渴と、全身を砕くやうな疼痛を感じた。

彼は、水を飲みたいと思ひながら、周囲を見廻した。が、巖壁の背後は、直ぐ礫^{げうかく}確な山になつて居るらしく、小川とか泉とかゞ、ありさうにも思へなかつた。それでも、烈しい渴は、彼を一刻も、ぢつとして居させなかつた。彼は、寝て居た岩から、身を剥がすやうにして立ち上つた。立ち上るとき身体のもろくくの関節が、音を立てゝ軋るやうに思つた。彼は、それでも這ふやうにして、巖壁を降りることが出来た。彼は昼間（それは昨日であるのか一昨日であるのか分らなかつたが）夢中で、走つた道を、二町ばかり引返した。彼は、昼間其処を走つたとき、榕樹が五六本生えて居て、其の根に危く躓きさうになつたのを覚えて居た。彼の濁つてしまつて居る頭の中でも、榕樹の周囲を探せば水があるかも知れないと云ふ考が、ぼんやり浮んで居た。

が、榕樹の生えて居る周囲を、海の水あかりで、一三度探して廻つて見たけれども、其処らは一面に、唐竹が密生して居る

丈で、水らしいものは、少しも見当らない。俊寛は、その搜索に残つて居た精力を費ひ尽して、崩れるやうに地上へ横はると再び昏々として眠り始めた。

一度目に目が覚めたとき、それは朝だつた。疲れ萎びて居る俊寛の頬にも朝の微風が快かつた。彼が、目を開くと、自分の身体の上に茂り重つて居る蒼々たる榕樹の梢を洩れた、清々しい朝の日光が、美しい幾条の縞となつて、自分の身体に注いで居るのを見た。遠に、暫らくの間は、淨らかな氣持がした。が、直ぐ二三日来の出来事が、悪夢のやうに帰つて来、そして烈しい渴を感じたので彼はよろ／＼と立ち上つた。それでも、縹渺と無辺際に拡がつて居る海を、未練にももう一度見直さずには居られなかつた。が、群青色にはろ／＼と続いて居る大洋の上には、信天翁の一群が、飛び交つて居る外は、何物も見えない。成経や康頼を乗せた船が、今まで視野の中に止つて居る筈はなかつた。

彼が再び地上に身を投げたとき、身を焼くやうな渴と餓とが、烈しく身に迫つて来た。

彼は、赦免の船が来て以来、何も食つて居ないのだつた。基康は遠に彼をあはれがつて、船の中で炊いだ飯を持つて来て呉れたのであるが、瞋恚の火に心を焦して居た俊寛は、その久

し振の珍珠にも目を呉れないで、水夫の手から、それを地上に叩き落した。むろん、今でも自分の小屋まで帰れば乾飯ほしひも沢山残つて居る。が、俊寛には一里に近い道を歩く勇氣などは、残つて居なかつた。

烈しい渴と餓とは、彼の心を荒ませ、自殺の心を起させた。彼は、目の前の海に身を投げること考へた。さうして、何故基康の船が居る裡に、死ななかつたかを後悔した。基康や、あの裏切者の成経や、康頼の目前で、死んだならば少しは腹癒せにもなるのだつたと思つた。今死んでは大死であると思つた。が、死なうと云ふ心は変らなかつた。帰浴の望を永久に断たれながら、暮して行くことは彼には堪へられなかつた。二十間ばかり向うの岸に、一つの岩があり、その下の水が、殊更に深いやうに見えた。

彼が、決心して立ち上つたとき、彼はふと水の匂ひを嗅いだ。それは、真水の匂であつた。極度に渴して居る彼の鼻は、犬のやうに鋭くなつて居るのだつた。彼は、水の匂ひを嗅ぐと、その方角へ本能的に走り出した。唐竹の林の中を、彼は獣のやうに、潜つた。十間ばかり潜つたとき、その林が尽きて、其処から岩山が聳えて居た。

ふと、其処に、大きい岩を背後うしろにして、此の島には、珍らし

い椰子の樹が、十本ばかり生えて居るのを見た。そしてその椰子に掩はれた鶯色の岩から、一条の水が、銀の糸のやうに滴つて、それが椰子の根元で、小さい泉になつて居るのを見た。水は浅いながらに、澄み切つて、沈んで居る木の葉さへ、一々に数へられた。渴し切つて居る俊寛は、犬のやうに、つくばつて、その冷たい水を思ひ切り、ガブ／＼飲んだ。それが、何と云ふ快きであつたらう。それは、彼が鹿ヶ谷の山荘で飲んだ如何なる美酒にも勝つて居た。彼が、その清冽な水を味つて居る間は、清盛に対する怨みも、島に、たゞ一人残された悲しみも、忘れ果てたやうに清々しい氣持だつた。彼は、蘇つたやうな氣持になつて、立ち上つた。そして、椰子の梢を見上げた。すると、梢に大きい実が二つばかり生なつて居るのを見た。俊寛は、疲労を忘れて、猿のやうによち昇つた。それを叩き落すと、傍の岩で、打ち碎き、思ふさま食つた。

彼は、生れて以来、これほどの有難さと、これほどのうまさまで、飲食したことはなかつた。彼は椰子の実の汁を吸つて居ると、自分の今までの生活が夢のやうに淡く薄れて行くのを感じた。清盛、平家の一門、丹波少将、平判官、丹左衛門尉、そんな名前や、そんな名前に対する自分の感情が、この口の中の凡てを、いな心の中の凡てを、溶かしてしまふやうな木の実の

味に比べて、全く空虚なつまらないものゝやうな、気がし始めた。

俊寛は、口の中に残る快い感覚を、たのし楽みながら、泉のほとりの青草の上に寝た。そして、過去の自分の生活のいろ／＼な相を、心の中に想ひ出して見た。都に於けるいろ／＼な暗闘、陥擠かんせい戦争、権勢の争奪、それから来る嫉妬、反感、憎悪、さう云ふ感情の動くまゝに、狂奔して居た自分の浅ましさが、しみ／＼解つたやうな気がした。船を追つて、狂奔した昨日の自分までが、餓鬼のやうにあさましい気がした。煩惱を起す種のない、此の絶海の孤島こそ、自分に取つて、唯一の浄土ではあるまいか。康頼や、成経が傍に居たために、都の生活に対する、いな人生に対する執着が切れなかつたのだ。此の島を、仮のすみかと思へばこそ、硫黄ヶ岳に立つ煙さへ、焦熱地獄に続くものゝやうに、ものうく思はれたのだ。茲こゝこそ、つひのすみかだ。あらゆる煩惱と執着とを断つて、真如の生活に入る道場だ。さう思ひ返すと、俊寛は生れ変つたやうな、ほがらかな気持がした。

ふと、寝がへりを打つと、直ぐ自分の鼻の先に、撫子なでこに似た真赤な花が咲いて居た。それは、都人の彼には、名も知れない花だった。が、その花の真紅の花弁が、何と云ふ美しさと、淨らかさを持つて居たことだらう。その花を、ぢつと見詰めて居

ると、人間の凡てから知られないで、美しく香にはつて居る、かうした名も知れない花の生活と云つたやうなものが考へられた。すると、孤島の流人である自分の生活でさへ、むげむげに生甲斐のないものだとは思はれなくなつた。彼は、自殺しようとした自分の心の浅暮さを恥ぢた。彼の心には、今新しい力が湧いた。彼は勇躍して立ち上つた。そして、海岸へ走り出た。平素は、魂も眩むやうに、ものうく思はれた大洋が、何と美しく輝いて居たことだらう。十分昇り切つた朝の太陽の下に、紺碧の潮が、後から／＼湧くやうに躍つて居た。海に接して居る砂浜は、金色に輝き、飛び交うて居る信天翁あほうどりの翼から、銀の光を發するかと疑はれ、平素は、見ることを厭つて居た硫黄ヶ岳に立つ煙さへ、今朝は澄み渡つた朝空に、琥珀色に、優にやさしく棚曳たなひいて居る。

俊寛は、童わらわのやうなびやかな心になりながら、両手を差振げ、童のやうに叫びながら自分の小屋へ、駈け戻つた。

三

島に来て以来一年の間、俊寛の生活は、成経や康頼との昔物語から、謀反の話をして、おしまひには、お互の境遇を嘆き合

ふか、でなければ、砂丘の上などに昇りながら、浪路遙かな都を偲んで溜息を吐きながら、一日を茫然と過してしまふのであつたが、俊寛はさうした生活を根本から改めようとして決心した。

彼は、努めて都のことを考へまいとした。従つて、成経や康頼のことを、考へまいとした。彼は、成経や康頼が、深切に残して置いて呉れた狩衣や刺貫を、海中へ取り捨てた。長い生活の間には、衣類に困るのは、解り切つて居た。が、困つたら、土人のやうに木の皮を身に纏つても差支ないと考へた。

その上、三人で居た間は、肥前の国加瀬の荘にある成経の舅から平家の眼を忍んでの仕送りで、ほそくながら、朝夕の食に事を欠かなかつた。その為めでもあるが、三人は大宮人の習慣を持ち続けて、為すこともなく、毎日暮して居た。俊寛は、さうした生活を改め、自分で漁りし、自分で狩りし、自分で耕すことを考へた。

彼は、さう云ふ生活に入る第一歩として、成経や康頼の記憶が、付き纏つて居る今までの小屋を焼き捨て、自分で発見したあの泉の畔に、新しい家を自分で建ててゐることを考へた。

彼は、その日から、泉に近い山林へ入つて、樹を伐つた。彼が、持つて居る道具は、一挺の小さい鉞と二本の小太刀であつた。周囲が一尺もある樹は、伐り倒すのに、四半刻近くかゝ

つた。が、彼が額に汗を流しながら、その幹に鉞を打込むとき、彼は名状しがたい壮快な氣持がする。清盛に対する怨などは、さうした瞬間、泡のやうに彼の頭から消え去つて居る。そして、

その樹が鉞の幾落下に依つて、力尽き、地を揺がせて倒れるとき、俊寛の焼けた顔には、会心の微笑が浮ぶ。彼は、さうして伐り倒した樹の枝を払ひ、一本宛やつとの思ひで、泉の畔に引いて来る。彼は、その粗な丸太を地面に立て、柱とした。小太刀や、鉞で、穴を掘ることは可なり骨が折れた。殊に、さう云ふ仕事に用ゐることで、是から先の生活に、どんな必要であるかも知れない道具の、破損することを恐れねばならなかつた。

屋根は、唐竹で葺いた。此島の大部分を掩うて居る唐竹は、屋根を葺くのは、藁よりも、遙に秀れて居た。樹の枝を、横に幾つも並べて壁にした。そして、近所から粘り土を見出して、その上から塗抹した。彼は、此の新しい家を建てるために、二十日ばかりも懸つた。が、彼は自分の住む家を、自分で建てる事が、どんなに楽しみの仕事であるか分つた。その間、清盛に対する怨や、妻子に対する恋しさが、焼くやうに胸に迫ることがある。そんなとき、彼は常よりも、二倍も三倍も烈しく働く。無論、島に夕暮が来て、日が荒寥たる硫黄ヶ岳の彼方に落ち、唐竹の林に風が騒ぎ、名も知れない海鳥が鳴くときなど、

灯もない小屋の中に蹲まつて居る俊寛に、身を裂くやうな寂しさで、襲つて来る。が、昼間の烈しい労働が産む疲労は、直ぐ彼を、さうした寂しさから救つて呉れ、そして彼に安らかな眠りを与へて呉れる。

新しい小屋が出来たとき、彼はその次ぎには、食物のことを考へた。三人で、食ひ残した乾飯は、まだ二月三月は、俊寛一人を支へることが出来た。が、成経が居なくなつた今は、成経の舅から、仕送りがある筈はなかつた。今は、自分で食物を耕し作るより外はなかつた。俊寛は、新しい小屋から、二町ばかり隔つた処に、やゝ闊けた土地があり、硫黄ヶ岳に遠いために硫黄の気が少しもないことを知つた。

彼は、其処を冬の間を開墾し、春が来れば麦を植ゑようと思つた。が、差し当つては漁りと猟をする外に、食料を得る道はなかつた。

彼は、堅牢な唐竹を伐つて、それに蔓を張つて弓にした。矢は、細身の唐竹を用ゐ、矢尻は鋭い魚骨を用ゐた。本土ならばかうした矢先にかゝる鳥は、一羽も居なかつたらうが、此島に住んで居る里鳩、唐鳩、赤髭、青鷺などは俊寛の近づくのを少しも恐れなかつた。半日山や海岸を馳け廻ると、運び切れないほどの獲物があつた。

今までの彼は、狩はともかく、漁りはむげに卑しいことだと思つて居た。只管に、都会生活に慣れて居た彼は、さうしたことを真似て見ようと云ふ氣は起らなかつた。が、現在の彼は、土人に習つて漁りをして見ようと考へた。その頃の島は、鰻を取る季節であつた。永良部鰻は、秋から冬にかけて島の海岸の暖い海水を慕つて来て、其処へ卵を産むのであつた。土人は、海水の中に、身を浸してそれを手捕りにした。俊寛も、それに習つた。最初は、幾度擱んでも掴み損ねた。土人は、あやしい言葉で、何か云ひながら、俊寛を嗤つた。が、俊寛は屈しなかつた。三日ばかりも、根よく続けて試みて居る中に、魯鈍で、一番不幸な鰻が、俊寛の手にかゝる。五日と経ち、七日と経つ裡にどんな敏捷な鰻でも、俊寛の手から、逃れることが出来なくなつて来る。彼は、何十四と獲た鰻のアゴに、蔓を通し、それを肩に担ぐ。蔓が、肩に喰ひ入るやうに重い。が、自分が獲つたのであると思ふと、一匹だつて、捨てる氣はしない。小屋へ帰つてから、彼は小太刀で、腹を割き、腸を去つてから、それを日向へ乾す。半月ばかり、鰻を取つて居る裡に、小屋の周囲は乾した鰻で一杯になる。その裡に、鰻の取れる季節は、過ぎ去つてしまふ。そして、冬が来た。冬の間、俊寛は畑を作ることに、一生懸命になつた。彼は、先づ畑の爲めに選定した彼

の広闊な土地へ、火を放つた。そして、雑草や灌木を焼き払つた。それから、焼き残つた木の根を掘返し、岩や小石を取去つた。彼の鋏まさかりは、今度は鋏の用をした。道具がないために、彼の仕事は捗とりなかつた。土人の所に行けば、鋏に似たものがあるのを知つて居た。が、報酬なしに土人が、何物をも貸さないことを知つて居た。が、彼の精根は、さうしたものに、凡て打ち克つた。冬の終る頃には、一町近い畑が、彼の力に依つて、拓かれた。彼に、今最も必要なことは、其処に蒔かねばならない麦の種であつた。彼は、麦の種を土人が手放さないのを知つて居た。彼は、それと交易するために、自分の持物の中で、土人の欲しがりさうなものを、いろ／＼考へて見た。土人の欲しがりさうなものは、自分の生活にも、欠くべからざるものだつた。俊寛は、ふと鳥羽しづみねで別れるとき、妻の松の前から、形見に贈られた素絹しろうきぬの小袖を、今も尚そのまゝに、持つて居るのに気が付いた。それは、現在の彼に取つて、過去の生活に対する唯一の記念物だつた。彼は、一晚考へた末、此の過去の生活に対する記念物を、現在の生活の必須品に換へることを決心した。彼は、いとしい妻の形見を、一袋の麦に換へた。そして、それを彼が自分で拓いた土地に、蒔いた。

自分で拓いた土地に、自分の手で蒔いた種の生えるのを見る

ことは、人間の喜びの中では、一番素晴らしいものであることを、俊寛は悟つた。ほのかな、麦の芽が確かな地殻から、オゾ／＼と頭を擡ひきまうげるのを見たとき、俊寛は嬉し涙に咽なんだ。彼は跪ひざまういて、目に見えぬ何物かに、心からの感謝を捧げたかつた。鬼界ヶ島にも春は廻つて来る。島の周囲の海が、薄紫に輝き始める。そして、全島には、椿の花が一面に咲く。信天翁が、一日々々多くなつて、硫黄ヶ岳の中腹などには、雪が降つたやうに、集つて居る。

生れて初めての自然生活は、俊寛を見違へるやうな立派な体格にした。生白かつた頬は、褐色に焼けて輝いた。去年、着つけて居た僧侶の服は、いろ／＼のこゝをするのに、不便なので、思ひ切つて、それを脱ぎ捨て、思ひ切つて、皮かつらを身に纏つた。生年三十四歳。その壮年の肉体には、原始人らしい凡ての活力が現れ出した。彼は、生え伸びた髪を無雑作に藁で束ねた。六尺豊かの身体は、鬼のやうな土人と比べてさへ、一際立ち勝つて見えた。

彼は、時々自分の顔を、水鏡で映して見る。が、その変りはてた姿を、あさましいなどと思つたことはない。むろん現在の彼には、妻子が時々思ひ出される丈で、清盛の事などは、念頭になかつた。平家が、千里の彼方で、奢つて居ようが居まいが、

そんなことは、孰^{どち}らでもよかつた。それよりも彼は、自分が植ゑ付けた麦が、成長するのが、一日千秋の思で待たれた。

麦の畑に生ふる雑草を取ることは、彼の半日の仕事として、十分だつた。が、午後からは海岸へ出て、毎日のやうに鰺^{ぶり}を釣つた。糸は太い蔓を用ゐ、鉤^{はり}は獣の骨で作つた。三四尺の大魚は、鉤を入れると同時に、無雑作に食ひ付く。それを引き上げるのが、どんなに壮快であつたらう。それは、魚と人間との格闘であつた。俊寛は危く海の中へ、引きずり込まれさうになる。それを、巖^{いはかじ}角へ足をふんばつて、ぐつと持ち堪へる。魚はそのかゝつた鉤^{はづ}を脱^はさうとして、波間で白い腹をかへしながら身を悶える。さうした格闘が、半刻^{とま}近くもつゞく。その裡に、魚の力が弱つて来る。それでも尚、身体を烈しく捻ぢ曲げながら、水面に引き上げられる。

此の豪快な鰺釣が、此頃の俊寛に取つては、仕事でもあり、娯楽でもあつた。四尺を越す大魚を三四匹繋いで、砂の上を小屋まで引きずつて帰るのは苦しい仕事であつた。が、それを炙^{あぶ}ると、新鮮な肉からは、香ばしい匂が立ち、俊寛の健啖な食欲を、いやが上にも刺戟する。

彼は、毎日のやうに、近所^{うみかど}の海角に出て、鰺^{ぶり}を釣つた。彼は、その魚から油を取つて、灯火の油にしよう^{ともし}と考へたのである。

鰺は、群を成して、島の周囲を廻つて居た。俊寛は、その群を追うて、自分の小屋から、一里近くも遠方へ出ることもあつた。

その日も、俊寛は、鰺を釣るために、硫黄ヶ岳の直ぐ麓の海岸まで行つた。其処からは土人の部落が、半里とも隔つて居なかつた。土人達は、本土の人間を恐れ嫌つた。三人で居たときは、土人達は遠方から三人の姿を見ると、避けた。俊寛一人になつてからは、恐れはしなかつた。が、一種気味の悪いものゝやうに、決して近づいては来なかつた。俊寛も、なるべく土人と交渉することを避けた。土人の部落へは、出来る丈^{だけ}近寄らないやうにした。が、その日は、近所の海岸には、鰺の姿が見えないため、それを探しながら、到頭、土人の部落近くまで来てしまつた。

彼の鉤に、その海岸で、今まで上つたことのないやうな大魚がかゝつた。それは、鰺としても珍らしい五尺を越える大魚だつた。彼は、その巖^{いはかじ}角で、一刻^{いとま}近くも、それを釣り上げるために、奮闘した。彼は魚が逸しようとするときには、それに逆はないやうに、手の中の蔓を延ばした。もう延ばすべき蔓が、無くなると、蔓は緊張して、水を切りながらキイ／＼鳴つた。

彼は、魚が頭を自分の方へ向けたと知ると、その機を逸しな

いで、蔓を手早く手許へ繰り寄せる。一間はかりの水底まで来た魚は、奇怪な姿を見せながら、狂ひ廻る。が、水際までは決して上らない。そして、俊寛の手が、少しでも緩むと矢のやうに、沖へ逸走する。彼は蔓を延ばしたり、緩めたりすることに依つて、水中の魚を疲らせようとする。半裸体のまゝ巖頭に立つて、活動する俊寛の姿は目ざましいものであつた。

到頭、俊寛は、その五尺を越ゆる大魚を征服してしまふ。巖の上に釣り上げられた後も、尚跳躍して海に入らうとする魚の頭を、俊寛は傍の大石で、一打ちする。魚は尾や鰭を頼はせながら、死んでしまふ。俊寛は、その二十貫を越える大魚の腹に、足をかけながら、初めて会心の微笑を洩す。

その時俊寛は、ふと人の氣勢を感じた。魚を釣るために、夢中になつて居た俊寛は、気が付いて周囲を見廻した。見ると、何時の間に近寄つたのだらう、一人の土人の少女が、十間ばかりの後方に立ちながら、俊寛の姿をちつと見詰めて居るのだつた。恐らく、俊寛の勇ましい活躍を先刻から見て居たのだらう。

年は、十六七であつたらう。が、背丈はすく／＼と延びて、都の少女などには、見られないやうな高さに達して居た。腰の周圍に、木の皮を纏つた丈で、よく発達した胸部を惜し気もなく見せて居た。髪は梳らず、蔓草をさねかづらにして居た。

色は、黒かつたが、瞳が黒く人なつこく光つて居た。

長い間、女性と接したことのない俊寛は、この少女を一見すると、自分の裸体が、気恥しくなつて、思はず顔が赤くなつた。が、相手が少しの猜疑もなく、無邪気に自分を凝視して居るのを見ると、俊寛はそれに答へるやうに、軽い微笑を見せずには居られなかつた。少女は、微笑はしなかつたがその物珍らしげに刮つて居る眼に、好意を示す表情が動いたことは確かだつた。俊寛は、久し振りに人間から、好意のある表情を見せられたので、胸がきゅつとこみ上げて来るやうに感じた。

彼は、再び釣を海中に投じた。魚は、直ぐ食ひ付いた。その魚を引き上げる間、少女は熱心に見物して居る。そして第三番目の釣を投じても、少女は去らない。俊寛は、少女の方を振向きながら時々、微笑を見せる。少女は、硫黄を採るために来たのだらう。が、硫黄を入れる筈を傍へ置き捨てたまゝ、何時までも俊寛が鱈を釣上げるのを見て居る。

到頭夕暮が来た。俊寛は、釣上げた魚を、引きずりながら、自分の小屋への道を辿る。一町ばかり歩いて、後を振返つた。少女も家路に、向はうとして立ち上つて居る。が、歩き出さないで、俊寛の方を、ちつと見詰めて居る。

俊寛は、その日から自分の生活に、新しい希望が湧いたこと

に気が付く。彼は、その翌日も、同じ場所に行つた。すると、昨日きのふの少女が、昨日彼女が蹲まつて居たのと同じ場所に、蹲まつて居るのを見る。俊寛の胸には、湧き上るやうな欣びが、感ぜられる。今日こそ、昨日よりも、もつと大きい鰯ぶりを釣り上げて、少女に見せてやらうと思ふ。が、昨夜の間に、鰯は此海岸を離れたと見え、幾何いくばく釣を投げて、手筈がない。

彼はいら／＼して、幾度も／＼釣を投げ直す。が、幾度投げ直しても、手筈がない。彼は、少女が退屈して、立ち上りはしないかと思ふといら／＼して来る。が、少女はちつと蹲まつたまゝ身動きもしない。俊寛は、外の釣場所を探らうと思ふけれども、少女が若し随もいて来なかつたらと思ふと、此の場所を動く気はしない。その裡に、俊寛は疲れて、釣を水中に投じたまゝ、手を休めてしまふ。

その時に、突然か彼の少女が叫び始めた。俊寛は、最初彼女が、何か自分に話しかけて居るのではないかと思つた。が、少女は天の一方を見詰めながら叫んで居る。その裡に、俊寛は、その叫び声の中に、ある韻律があるのに気が付く。

そして、此少女が歌をうたつて居るのだと云ふことが分る。それは朗詠や今様などとは違つて、もつと急調な烈しい調子である。が、その聴き馴れない調子、意味の全く分らない詞の中

に、此の少女の迫つた感情が、漲つて居るのを俊寛は感ぜずには居られなかつた。

俊寛は、やるせなく此少女が、いとしくなる。歌ひ終ると、少女は俊寛の方へ、その黒い瞳の一瞥を投げる。俊寛は堪らなくなつて立ち上り、少女の方へ進む。すると、今まで蹲まつて居た少女は、急に立ち上つて五六間向うへ逃げる。が、其処に立ち止まつたまゝ、それ以上は逃げようとはしない。俊寛は、微笑をしながら手招きする。が、少女は微笑を以て、それに答へるけれども、決して近寄らない。俊寛は、じれて元の場所へ帰る。すると、少女も元の場所へ帰つて蹲まる。そして、時々思ひ出したやうに歌ひつゞける。

その翌日も、俊寛は同じ場所に行つた。その翌々日も、俊寛は同じ場所へ行つた。もう鰯を釣る目的ではなかつた。

幾日も／＼、さうした情景が続いた後、少女は到頭その牝鹿のやうに、しなやかな身体を、俊寛の強い双腕もうでに委してしまつた。

俊寛は、もう孤独ではなかつた。彼の少女は、間もなく俊寛のために、従順な愛すべき妻となつた。無論、土人達は彼等の少女を拉したのを知ると、大挙して俊寛の小屋を襲つて来た。二十人を越す大勢に対して、少しも怯ひるむ所なく、鉞を以て、立

ち向つた俊寛の勇ましい姿は、少女の俊寛に対する愛情を増すのに、十分であつた。が、恐しい惨劇が始まらうとする刹那、少女はいちはやく、土人の頭らしい老人の前に身を投じた。それは、少女の父であるらしかつた。老人は、少女から何事かを聴くと、怒り罵る若者達を制して、事もなく引き上げて行つた。

その事件があつた後は、俊寛の家庭には、幸福と平和の外は、何物も襲つて来なかつた。

手助けの出来た俊寛は、自分達の生活を、いろ／＼な点で、よくして行つた。都会生活の経験のよい所丈を、妻に教へた。無智ではあつたが、利発な彼女は俊寛のいふことを理解して、少しづつ家庭生活を愉快にして行つた。

結婚してから、直ぐ俊寛は、妻に大和言葉を教へ始めた。三月経ち四月経つ裡には、日常の会話には、事を欠かなかつた。蔓草のさねかづらをした妻が、閑雅な都言葉を口にするのは俊寛に取つて、此上もない楽しみであつた。言葉を、一通り覚えてしまふと、俊寛は、よく妻を砂浜へ連れて行つて、字を書くことを教へた。浅香山の歌を幾度となく砂の上に書き示した。妻は、その年の裡に、妊娠した。かうした生活をする俊寛に取つて、子供が出来ると云ふことは普通人の想像も及ばない喜びだつた。俊寛は、身重になつた妻を普めるやうに、勉めるので

あつた。翌年の春に、妻は玉のやうな男の子を産んだ。子供が出来てからの俊寛の幸福は、以前の二倍も三倍もになつた。

俊寛の畑は毎年よく実つた。彼は子供が出来たのを機会に、妻に手伝はせて、小屋を新しく建て直した。もう、どんな嵐が来ても、ビクともしないやうな堅牢なものになつた。

男の子が生れたその翌年に、今度は女の子が生れ、その二年目に今度は又男の子が生れた。子供の成長と共に、俊寛の幸福は、限りもなく大きくなつて行つた。彼は、鬼界ヶ島に流されたことが、自分の不運であつたか、幸福であつたか分らないとまで、考へるやうになつて居た。

四

ありぢう、故主の俊寛を尋ねて、都からはる／＼と、九国に下り、其処の便船を求めて、硫黄商人の船に乗り、鬼界ヶ島へ来たのは、文治二年の如月半ばの事だつた。

じゆえい、寿永四年に、平家の一門は悉く西海の藻屑となり、今は源家の世となつて居るのであるから、俊寛に対する重科も、自然消え果て、赦免の使者が、朝廷から到来すべき筈であつたが、世は平家の余類追討に急がはしく、その上、俊寛は過ぐる治承

三年に、鬼界ヶ島にて、絶え果てたと云ふ風聞さへ伝はつて居たから、俊寛の事などは、何人の念頭にもなかつた。

たゞ、故主を慕ふ有王文は、俊寛の最期を見届けたく、千里の旅路に、憂き艱難を重ねて、鬼界ヶ島へ下つたのである。

島へ上陸した有王は、三日の間、島中を探し廻つた。が、それらしい人には絶えて会はなかつた。島人には、言葉不通のため、訊き合はずべき、よすがもなかつた。その裡に、便乗して来た商人船の出帆の日が迫つた。今は俊寛が生活した旧蹟でも見たいと思つて、人の住む所と否とを問はず、島中を縫ふやうに馳け廻つた。

四日目の夕暮、有王は人里遠く離れた海岸で、人声を聞いた。それが思ひがけなくも大和言葉であつた。有王は、林の中を潜つて、人声のする方へ、行つた。見ると、其処は、ひろくと拓かれた畑で、二人の男女の土人が、並んで耕して居るのであつた。然も、彼等は和言葉で、高々と打ち語つてゐるのであつた。有王は、駭きの余りに、畑の傍に立ち竦んでしまつた。有王の姿を見たその男は、直ぐその鋤を捨て、つか／＼と傍へ寄つて来た。

その男は、ちつと有王の姿を見た。有王も、ちつとその姿を見た。その男の眉の上のほくろを見出すと、有王は、

「俊寛僧都どには、ましまさずや。」

さう叫ぶと、飛鳥のやうに、俊寛の手許に飛び繼つた。

その男は、大きく肯いた。そして、その日に焼けて、赤銅のやうに光つて居る頬を、大粒の涙がほろ／＼と流れ落ちた。二人は涙の裡に、暫くは言葉がなかつた。

「あなあさましや。などかくは、変らせ給ふぞ。法勝寺の執行として時めき給ひし君の、かくも変らせ給ふものか。」

有王は、さう叫びながら、さめ／＼と泣き伏した。が最初邂逅の涙は、一緒に流したが、然しその次ぎの咏嘆には俊寛は一致しなかつた。俊寛は逞しい腕を組みながら、泣き沈む有王の姿を、不思議さうに見て居た。

彼は、有王が泣き止むのを待つて、有王の右の手を掴んで、妻を磨くと、有王をグ／＼引張りながら、自分の小屋へ連れて帰つた。有王は、その小屋で、主に生き写しの二人の男の子と三人の女の子を見た。俊寛は、長男の頭を擦りながら、これが徳寿丸であると云つて、有王に引き合せた。その顔には、父らしい嬉しさが、隠し切れない微笑となつて浮んだ。

が、有王は凡てをあさまじいと考へた。村上天皇の第七子具平親王六世皇孫である俊寛が、南蛮の女と契るなどは、何事であらうと考へた。彼は、主が流人になつたため、心までが畜

生道に陥たのではないかと嘆き悲しんだ。

彼は、その夜、夜を徹して、俊寛に帰洛を勧めた。平家に對する謀反の第一番である丈に、鎌倉に在る右府どのが、僧都の御身の上を、決して疎かに思ふまいと云つた。

俊寛は、平家の一門が、滅んだと聞いたときには、遠に会心の微笑を洩し、妻の松の前や鶴の前が、身まかつたと云ふことを聞いたときには、涙を流したが、帰洛の勧めには、最初から首を横に振つた。有王が、涙を流しての勸説も、どうすること、出来なかつた。

夜が明けると、それは有王の船が、出帆の日であつた。有王は、主の心に物怪が憑いたものとして帰洛の勧めを思ひ切るより外はなかつた。

俊寛は、妻と五人の子供とを連れながら、船着場まで、見送りに来た。

そこで、形見にせよと云つて、俊寛が自分で刻んだ、木像を呉れた。それは、俊寛が、彼自身の妻の像を刻んだものだつた。

俊寛の帰洛を妨げるものは、彼の妻子であると思ふと、有王はその木像までが、忌はしいものに思はれたが、主の贈物をむげに斥ける訳にも行かないので、船に乗つてから捨てる心算で、何気なくそれを受取つた。

別れるとき、俊寛は、『都に帰つたら、俊寛は治承三年に、島で果てたと云ふ風聞を決して、打ち消さないやうにして呉れ。

島に生き永らへて居るやうなことを、決して云はないやうにして呉れ。松の前か、鶴の前が生き永らへて居たら又思ふやうもあるが、今はたゞひたぶるに、俊寛を死んだものと、世の人に思はずやうにして呉れ。』そんな意味を云つた。その大和言葉が、可なり訛が烈しいので、有王は言葉通りには覚えて居られなかつた。

有王の船が出ると、俊寛及びその妻子は、暫らく海辺に立つて見送つて居たが、やがて皆は揃つて、彼等の小屋の方へ歩き始めた。五人の子供達が、父母を中に挟んで嬉々として、戯れながら帰つて行く一行を、船の上から見て居た有王は、最初はそれを獣か何かの一群のやうにあさましいと思つて居たが、その裡に何とも知れない熱い涙が、自分の頬を伝つて居るのに気が付いた。

『菊池寛全集 第三卷』高松市発行より

※この作品の中には現代においては使われていない表現が使われていますが、文学作品ということをかんがみ、原文のまま掲載しました。